

e-Learning システム WebCT を用いた英語授業

熊本大学 大学教育機能開発総合研究センター 安浪誠祐

yasunami@ge.kumamoto-u.ac.jp

1. はじめに

熊本大学では、平成 15 年度から e-Learning システム WebCT を大学教育機能開発総合研究センターと総合情報基盤センターのそれぞれにおいて英語教育と情報教育の分野で運用実験を行いながら、実際の授業に活用していた。著者が所属する大学教育機能開発総合研究センターにおける WebCT を用いた英語教育の実践に関しては 2003PC カンファレンスの「ウェブ上のリソースを活用した英語授業」で報告した通りである。

この e-Learning システム WebCT が、平成 16 年度から総合情報基盤センターに一元化され、全学的に利用できるようになると共に、学外からのアクセスも可能となった。本稿では、勤務校における WebCT の運用、WebCT を利用した英語授業の現状、WebCT の有効活用と利用促進を図るための教材の共有化、そして WebCT の個別的な使用について述べることとする。

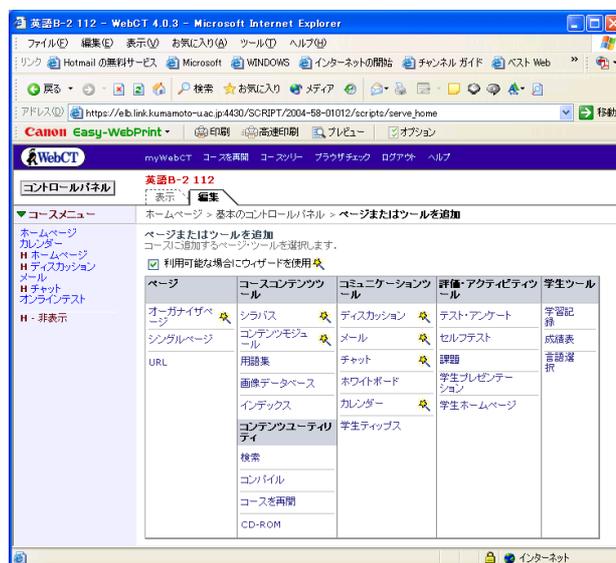
2. e-Learning システム WebCT とは

コース管理システム (Course Management System, CMS) はネットワーク上でコース (大学における授業、講義、科目を指す) を管理・運営するための e-Learning プラットフォームである。WebCT は 1995 年にカナダのブリティッシュコロンビア大学で開発された後、WebCT 社により開発とサポートが行われている。WebCT は現在全世界の 80 カ国以上、2,600 を越える高等教育機関で利用されており、北米では Blackboard と共に標準的な e-Learning システムとしての地位を確立している。日本においても 45 を越える高等教育機関に導入され活用されている。

WebCT は対面授業をサポートすることを主な利用形態としている。WebCT が提供する機能は次の通りである。

コース作成支援

- ・コンテンツモジュールによる講義ノートの作成
 - ・学習状況に応じた教材提示
 - ・自答採点可能なクイズ作成
 - ・課題レポートの出題・回収
 - ・グループ学習
 - ・シラバスの作成
- コース管理
- ・学習管理データベース
 - ・コンテンツのアクセス制限 (ツール単位)
 - ・成績の保守及び通知
 - ・コースカレンダー
- コミュニケーション
- ・電子掲示板
 - ・e-Mail (Web メール)
 - ・オンラインチャット
 - ・オンラインホワイトボード
 - ・学生 Web ページの公開



3. 熊本大学における WebCT の運用

熊本大学のネットワーク環境は年度毎に整備拡充されているが、平成 14 年度末には学生用端末 900 数十台が導入され講義や自習のために利用されることとなり、平成 15 年度には WebCT (3.5 キャンパス・

エディション Focus3000)2 サーバが情報教育と英語教育のために導入され実際の授業(情報基礎・情報処理概論・CALL 授業など)における学習支援に利用された。セキュリティ確保のため学内からのアクセスのみに制限されたため、その利用は限定的なものとなっていた。

平成 16 年度になり新バージョンの WebCT(4.0.3 キャンパス・エディション 15000FTE)が総合情報基盤センターに導入されると共に全学的に利用できるようになり、著者が管理する WebCT サーバはライセンス期間消滅と共にその役割を終えることとなった。総合情報基盤センターで管理が一元化された WebCT は、既存の学務情報システム SOSEKI と同期することによって学習者登録作業を自動的に処理するようになっている。現在、学部・大学院の全ての講義(7,571 コマ)、教員(1,791 人:延べ 10,061 人)、学生(10,509 人:延べ 92,083 人)が登録されている。教員側端末の myWebCT の画面のコース上に担当する講義の全てが表示され、学生側でも履修登録しているコース一覧が表示されている。更に、学外からの WebCT へのアクセスが許可され、教員も学生もインターネットに接続された端末があれば、いつでもどこからでも教材のアップロード、学習指導、レポート提出、質問などが可能となった。



4. 英語授業における WebCT の活用

4-1. 試行的運用

著者は平成 15 年度に大学教育機能開発総合研究センターに導入された WebCT に対するアドミニ権限者としてサーバ管理・学習者や講義の登録管理を行った。シート数が 3,000 に限定されていたため、Self-Access 型オンライン教材を用いた CALL 授業で WebCT を使用することとしたが、その許容の範囲内で CALL 授業以外での利用も許可した。

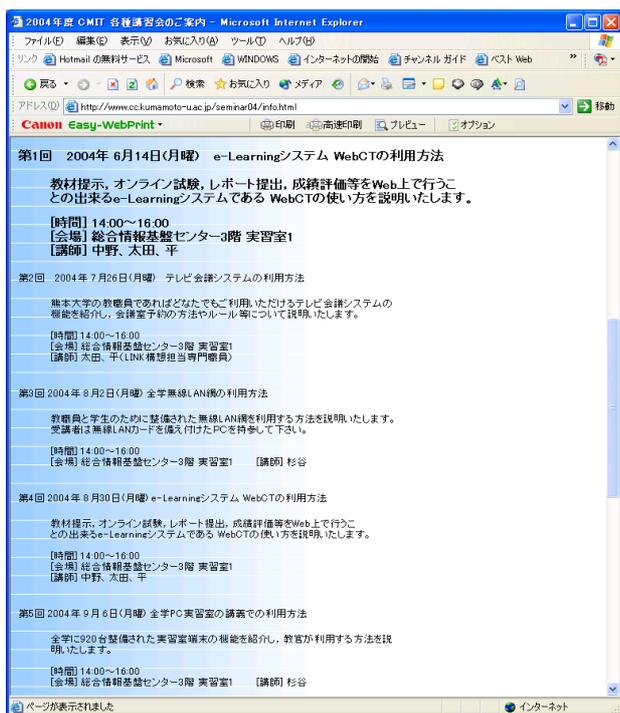
著者の実践に関しては 2003PC カンファレンスで報告した通りであるが、著者はリスニング演習の授業と CALL 授業を補完するツールとして使用した。WebCT が持つ多くの機能の中から小テスト、電子メール、カレンダーを主に用いた。電子メールは学生とのコミュニケーションのツールとして、カレンダーは掲示板として使用した。WebCT にはテスト・アンケート作成ツールが備わっているが、問題作成の操作が煩雑なため、別ツールを用いて小テストを作成した。教材作成ツールで作成した問題ファイルを WebCT にインポートし、テストの設定を編集することによって学生が利用できるようにした。

著者以外の英語担当の教員に対する FD 活動によって WebCT の教員ユーザを拡大させることができたが、WebCT 利用の方法は様々であり、それぞれの授業の目標に合わせて利用されていた。

4-2. 全学化に伴う FD 活動

平成 16 年度には WebCT が全学化され、学外からの利用が許可されたことを受けて、CALL 授業で使用している Self-Access 型オンライン教材も VPN 接続設定によって学外からアクセスできるようにした。英語教育における WebCT は主に CALL 授業における副教材の提供と学習支援に利用されているが、CALL 授業以外でも活用されている。学習者側におけるオンライン学習環境が整うと共に、教員側からのオンラインによる学習サポートが可能となったが、主に教員に対する FD 活動の不足のために、WebCT の機能や利用方法などが周知されているとは言い難いと思われる。著者は昨年度の WebCT サーバの管理を行っていた関係で、今年度当初に新バージョンの WebCT に関

するFD活動を行ったが、参加者は旧バージョンの使用者が殆どであった。そのため、文系の教員に対してWebCTの存在をアナウンスしながら、その機能と使用法などに関していつでも対応できるような態勢を取っている。WebCTサーバの管理運用を統括している総合情報基盤センター主催のFD講習会も計画されているが、どちらかと言うと理系向けの講習会であるため、文系教員対象の講習会を行う必要があるようである。

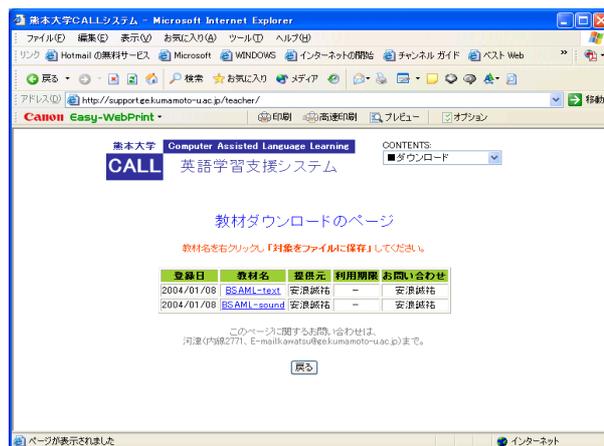


4-3. 教材の共有化

WebCTの特徴の一つとして、教材のファイルの共有化ができるということであるが、英語授業ではWebCT上で展開する教材の開発に関しては、各教員の自己努力によって行われているのが現状である。著者の場合はCALL授業の副教材として学部毎のニーズに合わせた教材を作成している。著者の場合、担当学部が医学部・教育学部・法学部・工学部と複数であるが、それぞれの学部に対応したコンテンツの教材を作成している。デジタル化された教材ファイルは再利用可能なため、他の教員による授業でも利用することができる。

著者が作成した教材の再利用を希望される教員に対しては教材の提供を行っている。提供方法は次の通りである。WebCTの操作が苦手な教員に対しては、

提供先の教員のMy WebCTにログオンして教材ファイルをインポートして教材として設定を行っている。また、教材ファイルはファイルサイズが小さいため、電子メールの添付ファイルとして送付することができ、学内はもとより学外へも提供することが可能である。更に、教材がダウンロードできるようなWebページを構築して、学部毎のニーズに合わせて作成された教材一覧から必要なものを教員がダウンロードして使用することができるようにしている。



全学部対象の共通科目である情報基礎科目ではcrosslisted機能を用いて全クラスで共通の教材を使用している。昨年度は授業回数毎に教員が分担して教材を作成されて作業労力を分散されていたが、今年度は用語等の統一を図るため1人の担当教員によって前年度の教材の改訂が行われている。このcrosslistedの機能は同じく全学共通科目であるCALL授業の副教材配信にも活用することができる。教材開発チームを編成することによって教材の統一化を図りその質を高めることができるようになるものと考えられる。

4-4. 授業デザイン

前節では教材の共有化について述べたが、WebCTは教材の共有化・共通化を目指すだけのものではない。WebCTは本来的にはいわゆる対面授業を補完するために用いられるものである。予習→対面授業→復習のサイクルの中でWebCTにどのような役割を与えるかは、それぞれの授業を担当する教員が考えるべきことである。授業デザインという観点から、授業の目標が明確化され、その目標達成のための授業

のデザインが行われ、その授業の中で WebCT の位置づけが行われることとなる。授業の担当者によって WebCT の運用方法は多様なものとなり、授業及び教材の個性化・個別化も見られるようになる。WebCT に備わっている機能を全て用いる必要はなく、授業の目的に応じて選択的に利用できるようになっている。講義ノートなどはコンテンツモジュールで作成され、学生とのコミュニケーションには Web メールや電子掲示板やオンラインチャットが用いられ、レポート提出には課題機能が使用され、学習状況管理やテスト・アンケートの集計結果の把握もできる。

4-5. サポート体制の確立

授業を担当する教員一人ひとりの自己努力も必要であるが、これにも限界があると考えられる。これまで経験したことのないようなシステムを使いこなすにはそれなりの技術面及び授業デザイン面からのサポートが必要である。4-2.では全学化に伴う FD 活動について述べたが、日常的に教員に対するサポートを行う組織や仕組みが必要不可欠のものである。教員からの疑問に回答したり助言を与えるような受動的なサポートだけでなく、教員から提供された素材を基に教材作成の代行を行うような能動的なサポートも必要なものである。また、授業デザインに関する的確な助言を与えてくれるような組織集団も必要である。

5. おわりに

WebCT には多くの機能があるが、教員は各自の授業目標に応じて機能を選択的に使用することができる。文字・音声・動画などのマルチメディアを教材として使用したり、電子メールや掲示板機能を用いた教員と学習者及び学習者同士のコミュニケーション活動を行ったり、簡単なテスト機能を用いることが可能であることから、英語学習支援システムとして十分に活用できるものである。

IT 環境を活用した学習支援システムはこれまでの授業形態に変化をもたらすことになる。これまでの授業に対する評価を行うことが必要である。その評価に対する検討の結果として、e-Learning システ

ムである WebCT の機能の中から必要なものを使用することになる。そのためには教員に対する授業デザインに関する FD 活動も活発に行われる必要があり、更に日常的なサポート体制の確立も求められる。

WebCT が効果的に活用できるかどうかは偏に使用する教員一人ひとり或いは教員集団のアイデア次第である。

参考文献

- (1)池田輝政、戸田山和久、近田政博、中井俊樹(2001)『成長するティップス先生－授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部
- (2)熊本大学(2003)『平成 15 年度「特色ある大学教育支援プログラム」に熊本大学の取組が採択されました』、オンライン資料 (<http://www.kumamoto-u.ac.jp/NEWS/K-095.htm>)
- (3)中島英博、中井俊樹、山里敬也、岡田啓、城下英行(2003)『名古屋大学版 e ラーニングハンドブック』名古屋大学・高等教育研究センター・情報メディア教育センター
- (4)安浪誠祐(2002)「Self-Access 型教材を用いた CALL 授業」『IT を利用した外国語教育の改善－2002 年 JALT 京都支部年次大会論文集』、全国語学教育学会京都支部、pp.19-24
- (5)安浪誠祐(2003)「Web 上のリソースを活用した英語授業について」『2003PC カンファレンス論文集』、コンピュータ利用教育協議会、pp.399-402
- (6)安浪誠祐(2004)「医学部英語教材語彙分析－専門学部教員使用教材と英語担当教員自作教材の比較研究－」『ESP の研究と実践』第 3 号、大学英語教育学会九州沖縄支部 ESP 研究会、pp.95-100